

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820046

研究課題名（和文）平安時代仮名作品および漢詩文作品にみる中国文学受容の様相

研究課題名（英文）The Influence of Chinese Literature on Heian-Period Literature Written in Japanese and Chinese

研究代表者

長瀬 由美 (NAGASE YUMI)

明治大学・研究・知財戦略機構・客員研究員

研究者番号：20553324

研究成果の概要（和文）：

本研究では、『源氏物語』と平安時代中期漢詩文作品にみられる、中国『文選』および『白氏文集』散文受容のありかたを調査した。白居易散文作品に含まれる、中唐白居易文化圏で磨かれた諷諭精神や政治社会に対する考え方、さらに虚構作品を作る方法が、一条朝文人達の詩文中に受けとめられていることを確認し、また『源氏物語』にも同様にそれが認められることを検証し、平安中期の中国文学受容の特徴と、漢文脈と和文脈での受容の同時代性を照らし出した。

研究成果の概要（英文）：

This research investigates the influence of the *Wen Xuan (Selections of Refined Literature)* and prose verses by Bai Juyi on *The Tale of Genji* and other works written in classical Chinese in mid-Heian Japan. The study illuminates that literary courtiers during the Ichijo's reign favorably absorbed Bai Juyi's polished satirical style, critical depiction of the politics and society, and manner of constructing fictional verses. Contemporaneously, *The Tale of Genji* displays the author's absorption of Bai Juyi's literary techniques and approaches as well. My argument is that Bai Juyi's literature influenced the mid-Heian literature generally, both the tales written in Japanese and the poems written in Chinese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	760,000	228,000	988,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,260,000	378,000	1,638,000

研究分野：日本古典文学

科研費の分科・細目：人文学・日本文学

キーワード：漢詩文、平安朝、中国文学受容、白居易、文選

1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』研究は今日、記号学的テク

スト理論やカルチュラル・スタディーズなど、欧米の文学理論・文化理論を用いて作品分析することが盛んである。その一方、漢詩文の引用頻度の圧倒的な多さが示すように、『源氏物語』が他の仮名作品をはるかに凌いで漢詩文と深い関係を持つにも関わらず、その漢籍受容の問題について専門的に研究する者は少ない。また、『源氏物語』と平安時代中期一条朝漢詩文における漢詩文（中国文学）受容の問題についていえば、『白氏文集』所収の白居易韻文の受容に関してはある程度の解明がそれでも進んでいるものの、中国六朝作品受容の問題、白居易散文受容の問題に至っては、まだ殆ど扱われていない状況にある。他方近年では、『白氏文集』古抄本研究や中国での漢籍データベースの整備が急速に進んでおり、これらの成果を駆使することによって従来の用例調査や出典研究を飛躍的に進展させ、一条朝の漢籍（中国文学）受容の総体的なあり方を解明することが出来る見通しがある。そこで、一条朝文人の漢詩文諸作品についてデータベース等を活用し基礎研究の充実を図り、それを基にして一条朝の漢籍（中国文学）受容の総体的なあり方を解明し、『源氏物語』の漢籍受容の態度との比較検討を行うことを目指した。

2. 研究の目的

日本古典文学研究は近代以降、和歌や物語の研究に比して日本漢詩文の研究が立ち遅れ、特に平安時代の漢詩文が収められる『本朝文粹』の研究については、本格的な注釈が柿村重松により大正十一年（1921）初めて成るがその後の進展は少なく、出典研究自体いまだ十分でない状態にある。このような平安漢詩文自体の研究の遅れのために、『源氏物語』の漢籍受容のあり方の同時代性及び独自性についてはいまだ具体的に解明し得ない部分

が多い。

しかし、仮名文学が興隆し国風文化が開花した時期として知られる、『源氏物語』が成立した一条天皇の長保寛弘期とは、実は漢文学的な文化的潮流もまた頂点に達した時代だったのであり、紫式部の父を含め『本朝文粹』『本朝麗藻』に作品を残すこの時代の文人詩人達の存在と活動が、『源氏物語』創作形成の背景基盤をなしていた。一条朝期の漢籍（中国文学）受容の問題を、『源氏物語』の中国文学受容の問題と照らし合わせながら解明することは『源氏物語』研究において極めて重要である。そもそも従来の平安文学研究では、国風文化を代表する最も“日本的な”作品とみなされてきた『源氏物語』に対して、中国文学の影響を強く受けて成立している側面に目を向け、積極的に取り上げることは殆どされてこなかった。しかし従来の唐風謳歌時代から国風時代へという平安文学史の図式には、平安文学のバイリンガルな姿は到底収まり得ないのであって、仮名文学世界と漢文学世界とが脈々と並存し、相互に影響し続けた国風時代の文学のありかたを、『源氏物語』および同時代の文人貴族達の漢詩文にみる漢籍（中国文学）受容の様相を相互に明らかにすることを手掛かりにして、克明にすることができるはずである。

近年では、白居易詩の受容が次第に明らかになってきたなかで、白居易の散文作品、及び、白居易『白氏文集』に並んで平安朝貴族達に重視された『文選』を中心とする六朝文学受容の様相については、なお殆ど研究が進んでいないテーマである。そこで、『源氏物語』と平安中期漢詩文における、白居易散文作品と『文選』受容の特質を解明することにより、一条朝漢詩文に対する典拠調査等の実証的研究を前進させるとともに、『源氏物語』の中国文学受容の問題を、同時代の中国文学受容の動向を含めた総合的な視点から照らしみることで総合深化させる

ことを目的とした。

3. 研究の方法

『文選』受容については、『源氏物語』に引用されている『文選』作品を中心に、それらが平安朝漢詩文に用いられているか否かおよびその頻度を調査した。具体的に対象としたのは『本朝文粹』『本朝麗藻』『江吏部集』所収の作品である。『本朝文粹』については各種索引および近年作られた『本朝文粹』の柿村重松の注を含むデータベースを活用し、また『四庫全書』『中国基本古籍庫』等の漢籍電子文献を利用し、出典として用いられていることの確認された『文選』所収作品が、他の平安中期漢詩文にも典拠として用いられていないかの確認、また柿村注で典拠不明・未指摘の箇所について、漢籍電子文献を利用して六朝作品に典拠がないかを調査し基礎研究の充実を図った。

『白氏文集』散文受容の解明については、古抄本研究の成果を活用し、平安時代の旧を伝える本文を参照して行った。具体的に『白氏文集』古抄本としては、金澤文庫本の影印（勉誠出版刊）および内閣文庫蔵『管見抄』のマイクロ資料を主に用いた。白居易の散文作品の数は膨大だが、藤原実資が関与したとされる惟宗允亮『政事要略』中に引かれる白居易「策林」など、享受されていたことの確かな白居易散文作品についてまず取り上げた。それらが保胤・実資以外の文人貴族達の詩文にも引用されているかどうかを調査し、どのようなサークル・人間関係の中で各散文作品が受容されているか、その傾向を探った。

4. 研究成果

平安時代中期の漢詩文作品と『源氏物語』について、中国六朝の『文選』および『白氏文集』所収の散文作品の受

容を調査した。白居易散文の受容については、『白氏文集』中「策林」について取り上げ、とりわけ一条朝の明法家惟宗允亮の手に成る『政事要略』中に引用される「策林」を軸にして分析を進めた。同時代の白居易散文受容のありかたとの関連を探るべく、惟宗允亮と関わりの深い属文の貴族の日記、すなわち藤原行成『権記』と藤原実資『小右記』を徹底調査し、また行成によって成る『新撰年中行事』も確認し、行成・実資といった一条朝の一部の貴族に「策林」を中心とする白居易の散文作品が受容されていたこと、またどのような散文作品を享受するかについて、明法家允亮の傾向と連動していることから、彼の影響力の強さを想定できることを分析した。

その他白居易散文受容の例として『白氏文集』翰林制詔に関してその受容を調査し、翰林制詔の「擬制」という方法について、『本朝文粹』に所収される平安時代中期・菅原文時の意見封事三箇条にその方法が受容されていることを分析・考察した。この菅原文時は、『源氏物語』作者紫式部の父である藤原為時の学問の師であり、『源氏物語』に特有にみられる準拠という虚構の世界を創出する方法も、これら平安朝漢詩文における、白居易の虚構の方法の受容との関連を見出せることを考察した。

『文選』を軸とする中国六朝文学受容については、『源氏物語』の『文選』受容の様相の分析を軸に進めた。『源氏物語』須磨巻、謫居の光源氏の許を頭中将が訪れ二人の友情が確認される場面には、『文選』古詩十九首の第一首の引用が認められる。古詩十九首の一首目は遠く離れた男女の詩だが、唐代の五臣注はここに、暗主に放逐された賢臣の嘆きを比喻するのだと注する。平安時代、『文選』は李善の注とこ

の五臣の注を介して享受されていたのであり、物語の脈絡から『源氏物語』の『文選』古詩引用が『文選』五臣注の解釈をふまえたうえでの引用と思われることを考察した。さらに同じ須磨巻で光源氏と頭中将の間に交わされる和歌の表現においても、『文選』古詩第五首を踏まえる表現が認められることを分析し、それら『文選』古詩を須磨巻表現の背後にちりばめることによって、唐代の五臣注が記すところの、暗示的な政治批判の文脈を形成していること、物語がそのようにして、光源氏の政治的不遇の理不尽さや彼の正当性を暗に表現していることを明らかにした。さらにこうした五臣注に依る『文選』古詩受容・引用のありかたについて、『文選』古詩一九首が同時代男性文人達にどのように受容されているか、その際五臣注がどれだけ強く意識されているかの分析を進め、同時代の男性貴族達の詩作にみられる引用態度との関連を調査した。

これらの成果は研究年度内には発表し得なかったが、平成23年度前期中に論文にまとめて発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長瀬 由美 (NAGASE YUMI)
明治大学 研究・知財戦略機構
客員研究員
研究者番号：20553324